

令和 5 年 5 月 15 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01673

研究課題名（和文）歴史教師のプロフェッショナルコンピテンシーを高めるピリーフ研究の再構築

研究課題名（英文）Reconstructing Belief Studies to Enhance Professional Competencies of History Teachers.

研究代表者

宇都宮 明子 (Utsunomiya, Akiko)

島根大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：40611546

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,550,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、歴史教師のプロフェッショナルコンピテンシーを高める研究方法論を構築し、教師による授業実践の自発的な深化・発展を可能にする理論的にも実践的にも有効なピリーフ研究を提案することである。この研究目的を達成するために、一般教育学におけるピリーフ研究の研究方法論の解明、歴史教育学における同研究方法論の解明、日本・スイス・カナダの歴史教師のピリーフを調査する研究方法論の構築、各国の歴史教師のピリーフの調査という研究方法を採用した。～の理論的考察を踏まえ、各国の歴史教師のピリーフ調査を実施し、三か国で異なる歴史教師のピリーフの実態を解明し、日本の教育改革に向けた提案をした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本とスイスとカナダの歴史教師のピリーフの実態を解明することで、日本の歴史教育改革を考察することをめざした。その成果が以下である。第1は歴史教師のピリーフの構造規定を示したこと、第2は歴史教師のピリーフを調査する研究方法を提起したこと、第3は教師教育に寄与する歴史教師のピリーフ研究の枠組みを提起したこと、第4は三か国の歴史教師の歴史理論的ピリーフの特性を解明したこと、第5は日本の歴史教育改革に向けて問題提起したことである。

これらの成果から、本研究は歴史教育改革にとどまらず、教師教育にも重要な役割を果たす歴史教師のピリーフ研究という新しい研究領域を開拓したことに学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to construct a research methodology to enhance the professional competency of history teachers and to propose a theoretically and practically effective belief study that will enable spontaneous deepening and development of classroom practice by teachers. In order to achieve this research objective, we adopted the following research methods: (1) clarification of the research methodology of Belief Studies in general education, (2) clarification of the same methodology in history education, (3) construction of a research methodology to investigate the Beliefs of history teachers in Japan, Switzerland, and Canada, and (4) investigation of the Beliefs of history teachers in each country. Based on the theoretical considerations of (1) through (3), we conducted a survey of history teachers' beliefs in each country, elucidated the reality of different history teachers' beliefs in the three countries, and made suggestions for educational reform in Japan.

研究分野：歴史教育学研究

キーワード：歴史教師のピリーフ 歴史教育学研究 一般教育学研究 国際比較研究

1. 研究開始当初の背景

本研究の直接的な背景には、スイスのルツェルン教育大学のP.ガウチ教授が主宰する国際共同研究がある。研究代表者と研究分担者の原田信之は、国際共同研究プロジェクト「自国の歴史をどう伝えるか：中等段階の歴史授業における国際的な展望性の比較分析」に平成29年度より参加し、共同研究を行っている。同プロジェクトでは歴史教師のビリーフの調査研究を実施しており、研究代表者はビリーフ研究が歴史教育学の進展に果たす意義を認識するに至った。この共同研究に参加するカナダの研究者の報告からは、近年のカナダのビリーフ研究は英米圏の成果を教師教育に応用している点で先進的にリードしていることを確認した。一方、日本では言語系教科等においてビリーフ研究がなされてはいるが、教師の資質・能力の向上に直接的に寄与する学術的なビリーフ研究とはなっていない。社会系教科ではビリーフ研究自体はほぼ皆無で、教師の実践技量の向上に果たす有用性が認識されていないのが現状である。そこで、歴史教師の資質・能力をプロフェッショナルコンピテンシーとして明示化し、その育成を図るドイツ語圏やカナダの研究を援用し、日本の歴史教育学固有の研究方法論を構築することで、これまでの日本の一般教育学や歴史教育学ではなしえなかった真に学術的なビリーフ研究を提起したいと考えた。

ビリーフ研究に関する学術的背景には、日本における1980年代後半以降の教師教育の文脈で、授業における教師の意思決定の背後にあるビリーフを解明する研究が実施されてきたことがある。教師のビリーフは自らの意思決定に多角的に影響を及ぼす鍵となる概念とされてきた。一般教育学研究におけるビリーフ研究では、質問紙やインタビューでの調査や授業記録の分析を通して、教師の実践的知識を生成させ、その知識を授業改善に向けて有効に働かせるための思考様式、即ち、実践的思考様式の解明が試みられた。教科教育学研究でも、とりわけ言語系の教科教育では、外国語教師のビリーフを調査するために開発されたHorwitzのBALLIを援用し、教師のビリーフ、その形成・変容過程を解明する研究が多くなされてきた。

しかし、一般教育学研究のビリーフ研究では、質問紙による量的分析では、対象集団の一般的特性は明らかにされても各教師固有のビリーフは特定できない。個々の授業記録やインタビューによる質的分析では、一教師のビリーフは究明できるが一般化できない。実践的思考様式という曖昧な枠組み設定では教師の思考の傾向を明示化できないという課題がある。教科教育学研究におけるビリーフ研究では、ビリーフの解明自体が目的で、その解明にどのような意義があるのかが不明である。海外のビリーフ研究の研究手法の援用では日本固有の教師のビリーフの実態解明が困難であるという課題がある。これらの課題からビリーフ研究は蓄積されてはいても、実際の授業改善に有効に機能する研究となりえていないのが現状である。そのため、ビリーフ研究自体の意義も十分認識されず、本研究で対象とする歴史教育学研究では教師のビリーフに焦点を当てた研究は、前述の通り、ほぼ皆無なのである。

この課題に対して、上記の歴史教師のビリーフの国際共同研究では教師のプロフェッショナルコンピテンシーの構成要素を明確にし、その構成要素に教師のビリーフを位置づけ、ビリーフと他の構成要素との関係性を考察し、コンピテンシーを育成する上でビリーフが果たす決定的な役割を解明することを試みている。教師の資質・能力を明確化し、その実質的育成をめざす近年の教師教育の動向を鑑みると、共同研究から得られた知見はこの動向に込めるものである。ビリーフは教師の意思決定に影響を及ぼす鍵概念であるというビリーフの定義に立ち返り、教師のプロフェッショナルコンピテンシーの観点からビリーフ研究に取り組むことは、教育的にも学術的にも極めて意義が高いと確信するに至った。そこで、本研究では研究課題の核心をなす学術的「問い」として、ビリーフ研究をどのように応用し、実践活用すれば、教師のプロフェッショナルコンピテンシーを高めることができるのかを設定する。歴史教師のプロフェッショナルコンピテンシーを高める研究手法論に基づいて、歴史教師がすぐれた授業実践を自ら開発するためのビリーフ研究を構想できると考えたのが、本研究の背景であり、出発点である。

2. 研究の目的

上記の背景から導かれる研究の目的は、歴史教育学におけるビリーフ研究の研究手法論を構築し、それに基づいたビリーフ調査を通して、教師のプロフェッショナルコンピテンシーを高め、授業実践の自発的な深化・発展をもたらすビリーフ研究の活用を具体的に提起することであった。ビリーフ研究は、教科教育学研究においては教師のビリーフの特徴や形成要因を推測的に描き出すにとどまっていた。本研究は、ビリーフを歴史教師のプロフェッショナルコンピテンシーに位置づけることで、教師の授業実践力の向上に役立てる研究へと発展させる。そのために、一般教育学におけるビリーフ研究の研究手法論の解明、歴史教育学における同研究手法論の解明、日本の歴史教育学固有の同研究手法論の構築、日本の歴史教師のビリーフの解明、高等学校歴史教師によるビリーフの意識化と授業実践に関する検討という研究に取り組むこととした。以上、5点の研究目的を設定し、歴史教師を対象としたワークショップ、それを踏まえた歴史教師による授業実践を通して、教師自身がそのプロフェッショナルコンピテンシーに基づいて授業実践の自発的な深化・発展を促すことが可能になるとともに、授業実践の向上に有効に機能する理論的に裏づけられたビリーフ研究を提案することをめざした。

しかし、COVID-19 の感染拡大という状況において、歴史教師を対象とした研究枠組みでピリーフ研究を実施することが困難となったことで、研究目的を再考する必要に迫られた。当初は授業実践の向上に直接的に寄与するより実践的なピリーフ研究を想定していたが、内容志向から資質・能力志向へと転換を図る現在の日本の歴史教育改革に寄与する理論的なピリーフ研究へと変更することが適切であると判断した。

そこで、研究目的 高等学校歴史教師によるピリーフの意識化と授業実践に関する検討を、日本とスイスとカナダ三か国の歴史教師のピリーフの国際比較に変更することとした。そのため、最終的に、一般教育学におけるピリーフ研究の研究方法論の解明、歴史教育学における同研究方法論の解明、日本の歴史教育学固有の同研究方法論の構築、日本の歴史教師のピリーフの解明、日本とスイスとカナダ三か国の歴史教師のピリーフの国際比較という 5 つの研究目的とし、三か国の歴史教師のピリーフ調査を行い、三か国比較を通して日本の歴史教育改革の考察を図るピリーフ研究を実施することとした。

3. 研究の方法

上記の研究目的に即して、5 つの研究方法を採用した。

研究方法 1：一般教育学におけるピリーフ研究の研究方法論の解明

一般教育学研究におけるピリーフ研究の研究方法論を解明するため、英米圏やドイツ語圏の最新の研究成果を精査する。ドイツ語圏のピリーフ研究を主眼としつつも、ピリーフ研究の検討に欠かせないドイツ語圏のピリーフ研究に大きな影響を及ぼした英米圏のピリーフ研究も分析対象とする。とりわけ、ドイツ語圏のピリーフ研究は、英米圏のピリーフ研究のどこに着目し、教師のプロフェッショナルコンピテンシーをどのように捉え、ピリーフをそれにどう位置づけ、調査しているのかという観点から検討する。この検討で、英米圏やドイツ語圏における最先端のピリーフの理論的把握やピリーフの質的・量的調査手法、ピリーフ研究の教師教育への適用方法を明らかにした。

研究方法 2：歴史教育学におけるピリーフ研究の研究方法論の解明

大学の研究者等へのインタビュー調査、英米圏のピリーフ研究に関する主要文献の調査を行う。研究 1 と同様の手法で、英米圏やドイツ語圏の最新の成果を精査する。

研究方法 3：日本の歴史教育学固有のピリーフ研究の研究方法論の構築

研究代表者と研究分担者の協議を通して、研究方法 1・2 で解明した海外のピリーフ研究の研究方法論を日本の一般・教科教育学におけるピリーフ研究の研究方法論と比較考察することで、日本の歴史教育学への適用可能性と実現可能性を検討する。この検討から、日本の歴史教育学の文脈に沿ったピリーフ把握、ピリーフの調査手法、教師教育への活用方法を構想する。

研究方法 4：日本の歴史教師のピリーフの解明

歴史教師のピリーフを解明するため、研究 3 で提案した研究方法論に依拠し、中・高等学校歴史教師を対象としたピリーフ調査を行う。

研究方法 5：日本とスイスとカナダ三か国の歴史教師のピリーフの国際比較

三か国で実施したピリーフ調査の結果を統計処理し、その結果を分析、比較することで、各国の歴史教師のピリーフの実態を解明し、日本の歴史教師のピリーフの国際的な位置づけを明確にする。その上で、現在日本がめざす資質・能力志向の教育改革という観点から、日本の歴史教師のピリーフを検討する。

4. 研究成果

本研究の重要な成果は、三か国のピリーフの国際比較から導かれる。ピリーフ調査は 30 項目の選択式質問項目、「私たちはなぜ歴史を学ぶべきなのか」という記述式質問項目からなる。これら 30 項目は、歴史教師が有すると考えられる歴史観として、現在と未来の師としての歴史、学問としての歴史、語りとしての歴史、アイデンティティをもたらすものとしての歴史という 4 つを想定し、各歴史観に位置づくものである。日本では、171 名の歴史教師、150 名の教育実習生、スイスでは 161 名、カナダでは 76 名の歴史教師を対象とし、国際比較は選択式質問項目において実施した。国際比較は、因子分析とコレスポネン分析を主たる分析手法とする。

(1) 因子分析とコレスポネン分析の結果

日本の歴史教師の質問紙結果の因子分析から、現在や未来への指針としての歴史、アイデンティティをもたらすものとしての歴史、実用主義としての歴史、解釈されたものとしての歴史という 4 つの歴史観を示す因子が抽出された。スイスの歴史教師の質問紙結果の因子分析から、上記の想定した 4 つの因子が抽出された。カナダの歴史教師の質問紙結果の因子分析から、アイデンティティと現在や未来への指針をもたらすものとしての歴史、歴史的事実としての歴史、語りや描写としての歴史、批判的思考力をもたらすものとしての歴史という 4 因子が抽出された。

抽出された各国の因子に基づいて、コレスポネン分析を行った。次頁の図 1 は、日本の因子によるコレスポネン分析である。本図をみると、日本の歴史教師は現在や未来への指針としての歴史、アイデンティティをもたらすものとしての歴史に関して強く同意しており、実用主義としての歴史、解釈されたものとしての歴史の順に同意が低くなる傾向が読み取れる。スイスの歴史教師は、解釈されたものとしての歴史に同意する傾向が日本とカナダと比較してかなり

高くなっている。カナダの歴史教師は、他の2つの国と比べると、実用主義としての歴史に対して相対的にかなり強い同意を示していることが読み取れる。

図2のスイスの歴史教師の因子に基づいたコレスポネンス分析の結果では、日本の歴史教師は、現在と未来の師としての歴史、スイスの歴史教師は学問としての歴史、カナダの歴史教師はアイデンティティをもたらすものとしての歴史に対して、他の国よりも、また他のカテゴリよりも相対的に強く同意する傾向が表れている。

図3のカナダの歴史教師の因子に基づいたコレスポネンス分析の結果では、日本の歴史教師は、歴史的事実としての歴史に対して同意が高い傾向、スイスの歴史教師は、批判的思考力をもたらすものとしての歴史と語りや描写としての歴史の2つに強く同意する傾向があり、アイデンティティと現在や未来への指針をもたらすものとしての歴史、歴史的事実としての歴史とは距離を置いている。カナダの歴史教師は、語りや描写としての歴史に同意する傾向が高く、歴史的事実としての歴史、批判的思考力をもたらすものとしての歴史に対しても比較的高い同意を示している。

以上から、日本の歴史教師は、現在や未来への指針としての歴史、現在と未来の師としての歴史、歴史的事実としての歴史への同意が高い傾向を示している。スイスの歴史教師は、解釈されたものとしての歴史、学問としての歴史、批判的思考力をもたらすものとしての歴史への同意が高いことが特徴として挙げられる。カナダの歴史教師は、実用主義としての歴史、アイデンティティをもたらすものとしての歴史、語りや描写としての歴史への強い同意を示すことが特徴であると判断できる。

これより、各国の歴史教師のピラーの傾向性が読み取れる。日本の歴史教師は過去を事実と捉え、現在に教訓を与え、現在や未来の方向性を提示することが歴史を学ぶ意義であるとする傾向がある。スイスの歴史教師のピラーは、歴史を解釈として、歴史学の研究方法に基づいて歴史を探究することが歴史を学ぶ意義と捉える傾向が強い。カナダの歴史教師のピラーは、歴史は語られるものであり、語られた歴史からアイデンティティを獲得し、現在や未来にとり有益な示唆を得ることが歴史を学ぶ意義であるとする傾向がみられる。

これまでの分析を基に、各国の歴史教師のピラーの特徴を整理する。日本の歴史教師は、歴史を事実と捉え、歴史から教訓を得て未来への指針を獲得することが歴史を学ぶ意義と考えている。史資料に基づいて過去がどのようなであったのかを因果関係から理解する実証主義の立場を採り、この理解した過去の事実を現在の諸問題や未来の方向性を考察するために活かすことが日本の歴史教師の認識論的ピラーの潮流といえる。

スイスの歴史教師は、歴史を解釈と捉え、史資料の比較や関連づけといった探究を通して歴史解釈を形成することに歴史を学ぶ意義を見出している。歴史とは個人的な見解、それぞれの解釈であるという懐疑主義の立場を採用し、作成者の視点を史資料から読み取り、自身でも歴史学の研究方法に基づいて史資料を読解し、歴史解釈を形成することがスイスの歴史教師の認識論的ピラーの趨勢と捉えられる。

カナダの歴史教師は、歴史を語られるものと捉え、語られた歴史の表現から教訓や未来への指針、アイデンティティを獲得することに歴史を学ぶ意義を見出している。歴史は史資料を基盤と

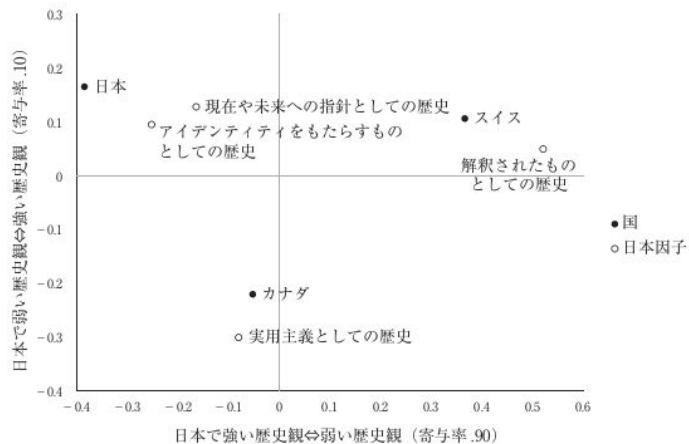


図1 日本の因子によるコレスポネンス分析

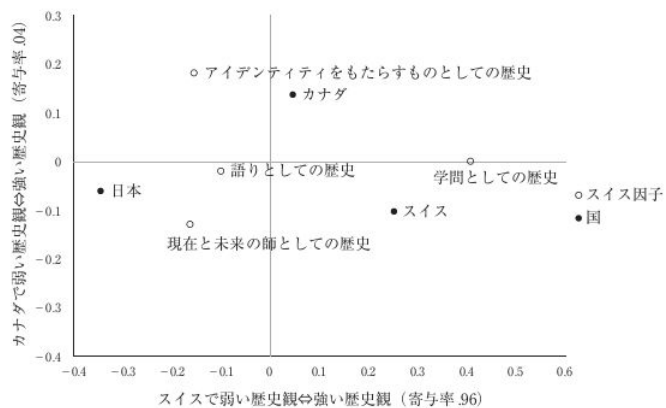


図2 スイスの因子によるコレスポネンス分析

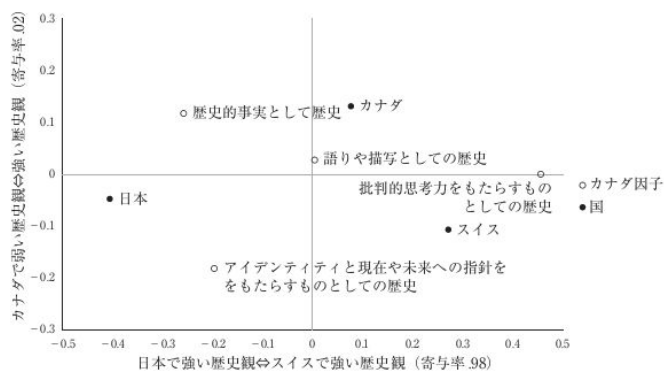


図3 カナダの因子によるコレスポネンス分析

して再構築するものであるという語りの構成主義の立場であり、現在についての考察や現在における実用性を重視しているため、歴史学概念や理論に基づきつつも、現代的な問題関心や未来の方向性から過去を説明し、表現することがカナダの歴史教師の認識論的ピリーの大勢と考えられる。

この国際比較から、三か国の歴史教師のピリーは大きく異なっていることが判明した。

(2)三か国の歴史教師のピリーから想定される歴史教育

日本の歴史教師のピリーは、史資料に基づいて過去がどのようなようであったのかを因果関係から理解する実証主義の立場を採り、この理解した過去の事実を現在の諸問題や未来の方向性を考察するために活かすものと捉えている傾向性を示した。この傾向性からは、生徒が過去を原因と結果からなる因果関係に基づいて歴史的事実を理解し、歴史的事実から学んだ教訓を基に現在の社会問題や今後の方向性を考察する歴史教育が想定される。

スイスの歴史教師のピリーは、歴史とは個人的な見解、それぞれの解釈であるという懐疑主義の立場を採用し、作成者の視点を史資料から読み取り、自身も歴史学の研究方法に基づいて史資料を読解し、自身の歴史解釈を形成するものと捉えている傾向性を持つ。この傾向性では、複数の史資料から作成者の視点で異なる歴史的事実に関する複数の歴史解釈を読解し、それらを比較したり、関連づけたりすることで、自身の歴史解釈を形成する歴史教育が想定される。

カナダの歴史教師のピリーは、歴史は史資料を基盤として再構築するものであるという語りの構成主義の立場であり、歴史学概念や理論よりも、現代的な問題関心や未来の方向性から過去を説明し、表現することを重視する傾向性が高い。この傾向性では、現代や生徒自身の問題関心や今後の方向性から過去の歴史的事実を解釈し、現在の視点から再構築して歴史を語る歴史教育が想定される。

以上の三か国の歴史教師のピリーの特徴から想定される歴史教育から、三か国ともに主体的、対話的で深い学びを通じた資質・能力の育成が確実に保証されているわけではないが、日本の歴史教師のピリーの傾向性では歴史的事実の理解にとどまるために、資質・能力志向への転換に向けて、三か国の中で最も困難な現状にあると判断することができた。

(3)資質・能力志向の歴史教育への転換に向けた考察

本研究では、歴史系科目固有の主体的・対話的で深い学びを、自らの問題関心に基づいた主体的な史資料の探究を通して、歴史的事実を認識、解釈することで、問題設定に即した適切な歴史像を選択し、その歴史像を論理整合性と反証可能性の観点から互いに検証してより妥当性の高い歴史像を共同構築する学びと捉える。この学びは、歴史学における史資料を読解、検証する実証主義的なスタンスのみならず、他者とともに歴史を再構築する構成主義的なスタンスも求める。これらのスタンスで取り組み続けることで、生徒主体の学びとなり、生徒が多岐にわたる資質・能力を発揮する資質・能力志向となるのである。スイスの歴史教師のピリーは前者のスタンス、カナダの歴史教師のピリーは後者のスタンスを取る傾向が高いといえる。スイスやカナダの歴史教師は、日本の歴史教師よりも、学問としての歴史や語りとしての歴史といった資質・能力志向の歴史教育と関連が深いピリーに対して明らかに高い傾向性を示している。一方、日本の歴史教師のピリーは、選択式質問項目の統計分析、記述式質問項目の回答のいずれをみても、歴史学における史資料の読解や検証を経た研究成果としての歴史的事実を学ぶことが重視され、いずれのスタンスからもまだ距離を置いており、これは資質・能力志向への転換からほど遠いことを如実に物語っている。

入試制度が変わらないと学校教育現場の歴史教育は変わらないとよく言われる。しかし、本研究の結果はこの流布している言説とは異なる結論を明らかにした。本研究での分析では、日本の歴史教師は過去の歴史的事実から学び、その教訓を現在や未来に活かすことこそが歴史を学ぶ意義であるという確固たるピリーを有することが判明した。このピリーは、現在に資する有益な示唆を与えるという歴史の実用性や有用性との関連が深く、歴史の事実を調べ、考察を深め、探究し、自らの言葉で歴史を語ることで歴史的思考力を育成する資質・能力志向の歴史教育とはつながりが希薄である。これは、日本の歴史教師は従来の内容志向の歴史教育を是としており、資質・能力志向への転換を歴史教師自身も求めていないことを意味する。これこそが、日本の歴史教育が変わらない根本的な理由といえるのではないだろうか。本研究は、内容志向から脱却する歴史教師の意識変革こそが、切実かつ喫緊の課題であるとデータに基づいて問題提起をしたことに意義があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 酒井 達哉、原田 信之、宇都宮 明子	4. 巻 7
2. 論文標題 認知系・非認知系コンピテンシーを輻輳的に育成する生活科授業開発 統合教科の新しい展望に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校教育センター紀要 = Bulletin of School Education Center	6. 最初と最後の頁 26～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14993/00002287	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宇都宮 明子	4. 巻 55
2. 論文標題 歴史教師のピリーフに関する研究方法論の考察：ピリーフ調査の質問項目の開発を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 島根大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 53～61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24568/54270	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宇都宮明子	4. 巻 37巻
2. 論文標題 コンピテンシー・ベースの学習指導要領への転換に関する考察 - バーデン・ヴュルテンベルク州ビルドゥング計画の分析に基づいて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 原田信之	4. 巻 36巻
2. 論文標題 ドイツ・チューリンゲン州第三次ビルドゥング計画(2019年版)における認知能力・非認知能力の育成 - 三次元構成論の能力枠への着目 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』	6. 最初と最後の頁 69-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宇都宮 明子	4. 巻 20
2. 論文標題 社会系教科における資質・能力の育成を図る評価課題の開発に向けた考察 パフォーマンス課題とHiTCH 評価課題の比較を基に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 島根大学教育臨床総合研究	6. 最初と最後の頁 99～113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24568/53827	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田信之	4. 巻 35巻
2. 論文標題 ドイツ初等教育「事実教授」における統合教科固有のコンピテンシーと関連性の可視化 - パーデン・ヴェルテンベルク州ビルドゥング計画を対象に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』	6. 最初と最後の頁 85-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上杉嘉見	4. 巻 2巻
2. 論文標題 教師のピリーフ研究の展開と課題 - アメリカを中心とした研究史を手がかりに -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『東京学芸大学次世代教育研究センター紀要』	6. 最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宇都宮 明子	4. 巻 53
2. 論文標題 スイスドイツ語圏における歴史教師のピリーフ研究に関する考察 日本でのピリーフ調査の実施に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 島根大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 27～36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24568/48851	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田信之	4. 巻 34巻
2. 論文標題 教職専門性の深部に迫るコンピテンシー構成要素 - ドイツ教授学における教師のピリーフ研究 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』	6. 最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田 信之, 酒井 達哉, 宇都宮 明子	4. 巻 33巻
2. 論文標題 横断的・縦断的な接続を図る生活科の再構築 - ノルトライン・ヴェストファーレン州事実教授レアプランを手がかりに -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』	6. 最初と最後の頁 39-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田信之	4. 巻 34巻
2. 論文標題 グループプロジェクトを取り入れた授業開発のための予備的実践研究 課題意識を高める導入段階の設定にみ焦点化して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校教育研究	6. 最初と最後の頁 148-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宇都宮 明子	4. 巻 42巻2号
2. 論文標題 社会科学習指導要領におけるアウトカム志向への転換に関する考察 - FUER歴史意識プロジェクトのコンピテンシ・モデルに基づいて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 13~23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18993/jcrdajp.42.2_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宇都宮明子
2. 発表標題 持続可能な資質・能力の育成を通して持続可能な社会の軽視絵に「間接的に」寄与する歴史学習
3. 学会等名 社会系教科教育学会第34回研究発表大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 原田信之
2. 発表標題 ハッティのメタ分析の結果に〇〇はどう向き合うべきか」（自主企画セッション 「教育における『エビデンス』を取り巻く論争点 - ジョン・ハッティの研究をどう読むか -
3. 学会等名 日本カリキュラム学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宇都宮明子
2. 発表標題 スイスドイツ語圏における歴史教師のピリーフ研究に関する考察 - 日本でのピリーフ調査の実施に向けて -
3. 学会等名 第30回社会系教科教育学会全国研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宇都宮明子、原田信之
2. 発表標題 Ueberzeugungen von Geschichtslehrpersonen zur Vermittlung der Geschichte des eigenen Landes
3. 学会等名 国際共同研究ワークショップ「歴史教師の教科特有のピリーフ」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宇都宮明子
2. 発表標題 Joint Project: Beliefs of history teachers to convey their own country 's history
3. 学会等名 カナダ・日本共同研究ワークショップ「歴史教師の教科特有のピリーフ」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 社会系教科教育学会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 社会系教科教育学研究のブレイクスルー	

1. 著者名 原田智仁編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 168
3. 書名 高校社会「歴史総合」の授業を創る	

1. 著者名 Nadine Fink/ Markus Furrer/ Peter Gautschi	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Wochenschau Verlag	5. 総ページ数 359
3. 書名 The Teaching of the History of One 's Own Country	

1. 著者名 社会認識教育学会、棚橋健治、草原和博、川口広美、金鍾成	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学術図書出版社	5. 総ページ数 208
3. 書名 中学校社会科教育・高等学校地理歴史科教育	

1. 著者名 ジョン・ハッティ、グレゴリー・イエーツ、原田 信之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 552
3. 書名 教育効果を可視化する学習科学	

1. 著者名 耳塚 寛明、浜野 隆、富士原 紀絵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 296
3. 書名 学力格差への処方箋	

1. 著者名 ジョン・ハッティ、クラウス・チーラー、原田 信之、矢田 尚也、宇都宮 明子、津田 ひろみ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 324
3. 書名 教師のための教育効果を高めるマインドフレーム	

1. 著者名 原田信之編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三恵社	5. 総ページ数 174
3. 書名 学校教育を深める・究める	

1. 著者名 ジョン・ハッティ、レイモンド・スミス、原田 信之、田端 健人、宇都宮 明子、高旗 浩志	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 スクールリーダーのための教育効果を高めるマインドフレーム	

1. 著者名 二井 正浩	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 レリバンスの視点からの歴史教育改革論	

1. 著者名 宇都宮 明子、原田 信之	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 歴史教師のピリーフに関する国際比較研究	

1. 著者名 原田 信之	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 230
3. 書名 ドイツの学力調査と授業のクオリティマネジメント	

1. 著者名 二井 正浩	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 290
3. 書名 レリバンスを構築する歴史授業の論理と実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Fachspezifische Ueberzeugungen https://public-history-weekly.degruyter.com/7-2019-19/historical-beliefs/#comment-14998	
---	--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	二井 正浩 (Nii Masahiro) (20353378)	成蹊大学・経済学部・教授 (32629)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	原田 信之 (Harada Nobuyuki) (20345771)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授 (23903)	
研究分担者	上杉 嘉見 (Uesugi Yoshimi) (10451981)	東京学芸大学・次世代教育研究センター・准教授 (12604)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	猫田 英伸 (Nekoda Hidenobu)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関